

美しくつかしい、日本をのせて。

Cradle

特集
私の人生の描き方

庄内憧憬
落合 淳志
東京理科大学 生命医科学研究所長

[クレードル] 出羽庄内地域文化情報誌

3

2023 March/April
TAKE FREE
NO.76



Cradle 3

美しくつかしい、日本をのせて。
「クレードル」 出羽庄内地域文化情報誌

2023 March/April
令和5年3月1日発行(隔月奇数月発行)第13巻4号(通巻76号)

発行：Cradle事務局 山形県鶴岡市山王町8-15 [株式会社 出羽庄内地域デザイン] 電話0238-(64)0888
制作：Cradle編集部 山形県酒田市京田2-59-3 [コウケンコーポレーション] 電話0234(41)0012



鶴岡市 松ヶ岡開墾場の桜

蚕室と共に歴史を刻む 松ヶ岡の桜

 庄内銀行

歴史において先人が何を考え、何を行ったかを理解し、良いものを良いとする自らの文化基準で評価する感覚。それこそが鶴岡の重要な文化の基盤であると感じます。

文化の基盤 落合淳志

中央省庁・研究機関の地方移転施策プロジェクトとして、国立がん研究センターの地域連携拠点事業で最初に鶴岡へ訪問した2016年の冬、羽田空港で「庄内空港に着陸できない場合は引き返すこともあります」とのアナウンスを聞きながら搭乗しました。実際に荒れ模様で、庄内空港上空で旋回し、3回目の着陸の試みで何とか着陸に成功しました。空港からの道には防雪柵が立てられ、田んぼには多くの白鳥が舞い降りていました。瀬戸内海育ちで雪の苦労を知らない私にとつての驚きでした。その後およそ2カ月に1度の割合で鶴岡を訪問し、庄内の歴史、食文化に触れることができました。

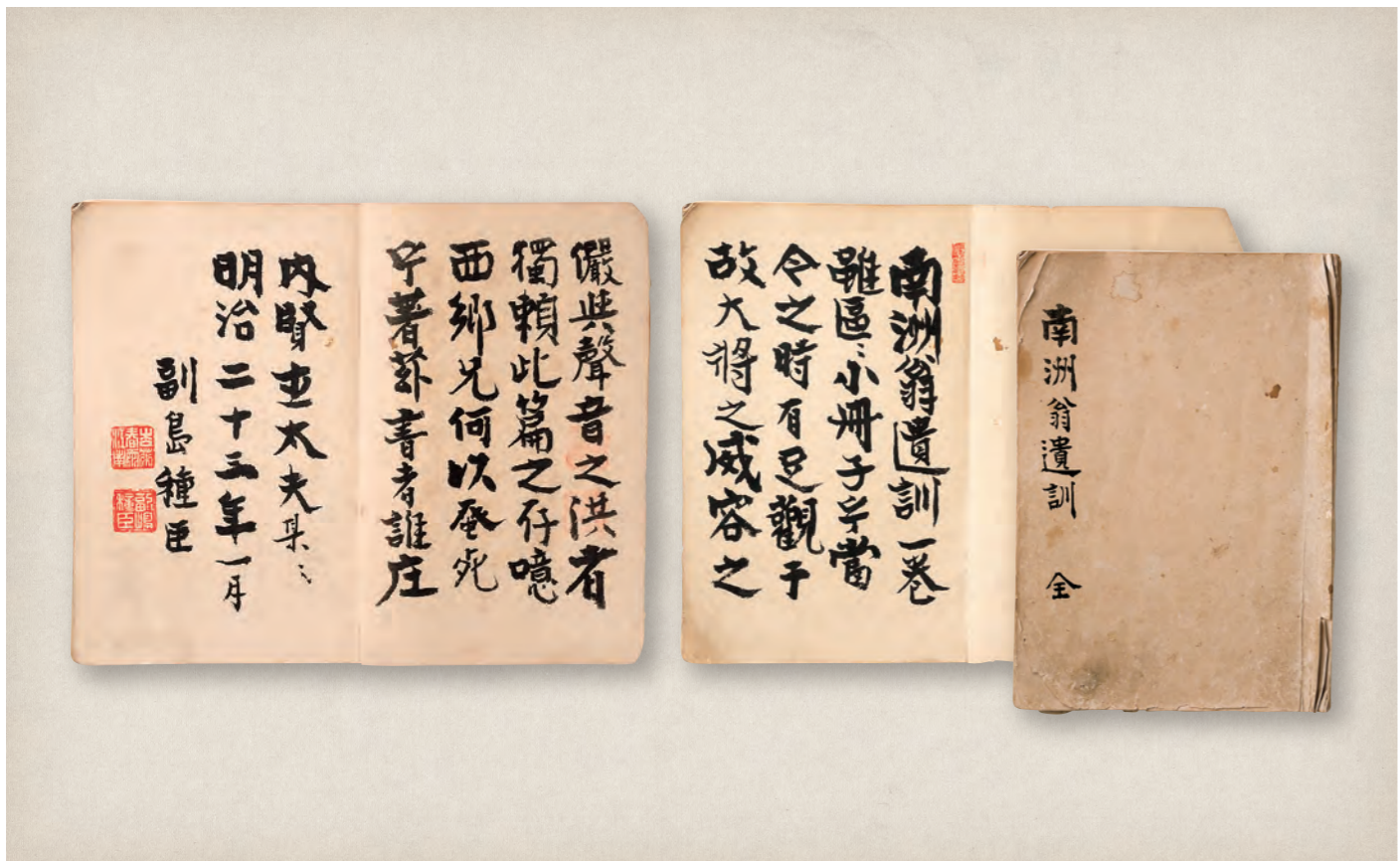
鶴岡には3つの日本遺産とユネスコ食文化創造都市としての顔があります。全国のどこにもこのような遺産を持つ都市はなく、庄内のすばらしい歴史と文化を示すものです。もちろんお米、豆、魚、お酒などすばら

しい食材や歴史が庄内に凝縮していることは事実です。しかし日本全国、その地域の歴史や産物そして人物を語ることはできても、それらを鶴岡のように地域文化として維持し、誇りを持って継承しているところは多くありません。鶴岡の人たちは歴史において先人が何を考え、何を行ったかを理解し、良いものを良いとする自らの文化基準で評価する感覚があり、これこそが鶴岡の重要な文化の基盤であると感じます。

その文化は、藤沢周平氏の小説が人（庶民）の心の動きを捉えていることや、旧庄内藩士らが幕末時には敵方だった西郷隆盛の言葉をまとめ『南洲翁遺訓』を編纂したことからもわかります。しかも西南戦争後、西郷が罪人の汚名を着せられている間にも発行準備が続けられ、官位回復翌年（明治23年）に出版されました。すばらしい人や物をすばらしいと評価するこのような文化は、なか

なか日本では少ないと思います。科学の世界においても、流行りの科学だけではなく、将来を開拓する科学とは何をするべきなのか、そしてその評価をどのようにすべきなのかはとても難しく、そして重要です。人、物を評価するすばらしい鶴岡の文化を引き続き育成していただくことは、同時に科学を基盤とした新しい地方都市としての鶴岡を作る基礎になると考えます。

私たちががんメタボローム研究開発と新しい医療社会実装化事業が、鶴岡の第5の顔である鶴岡の科学創造文化都市（勝手に作りましたが）として、新しい歴史と文化を作り上げる一翼を担える事業に発展することを期待したいと思います。



明治23(1890)年に出版された「南洲翁遺訓」(第二版)。菅家所蔵。
西郷隆盛の盟友で外務卿を務めた副島種臣が序文を寄せた。1,000部を出版し旧庄内藩士6名が3方に分かれ全国に頒布した。

おちあい・あつし/1956年広島県三原市生まれ。広島大学医学部を卒業後、西ドイツハノーバー医科大学で発がん研究を行う。91年より国立がんセンター研究所病理部で消化器病理の診断およびがん細胞の特徴を研究。98年より臨床腫瘍病理分野長。2014年から研究所副所長。16年から先端医療開発センター長。17年4月に開設した国立がん研究センター鶴岡連携研究拠点の総括責任者として、開設準備から運営全般に携わる。22年より東京理科大学生命医科学研究所長。20年より鶴岡市立加茂水族館クラゲ研究所客員研究員。がんの基礎研究および日本の病理診断の基盤を築いた功績から日本癌学会より長興又郎賞を授与。

何かしらの目的を持って初めて庄内を訪れた人
一度は遠く離れて、経験を携え庄内に帰ってきた人
それぞれ庄内の外側からの目を持ちながら
自分の内側で何をとらえ、どう過ごしてきたのでしょうか。
今回は、協力隊などの活動の先に庄内を拠点とした皆さんから
この土地での生活をご寄稿いただきました。
どこに行っても、どこで暮らしても、いくつになっても
自分がなすべきことを見つけることができれば。
そんな気持ちで一步踏み出したい季節、春はもうすぐです。

トビラ写真提供=田口比呂貴
鶴岡市大鳥に移住した田口比呂貴さんは、
山の暮らしを営みながら、山の知恵を学び、
Webメディアなどで伝えている。狩猟はその学びの一つ。
写真は先輩猟師たちと向かう巻狩り。

特集 私の人生の描き方

すべての世代が おもしろく暮らせる 心のふるさとに



大沢地区の住民たちが年3回行う大沢「大」文字の草刈り。「大」の真ん中で、大沢コミセンが見える風景をバックに(2022年8月)。



合同会社COCOSATO代表
山形県酒田市八幡地域
大沢地区・集落支援員
阿部 彩人さん

1980年、酒田市生まれ。酒田東高校、一橋大学社会学部を卒業(学生寮「荘内館」に在住)。卒業後はWeb・エンタメ業界で働く。2018年に酒田市にUターンし、八幡地域・大沢地区の地域おこし協力隊として活動。2021年4月より同地区の集落支援員に着任。同5月に合同会社COCOSATO(ココサト)を設立。

会社COCOSATO)を設立。地域資源を生かした特産品作りやキッチンカー、じゅんさい採りなどの里山体験、動画制作・イベント企画などの事業を展開しています。

人口減少と高齢化が進む大沢地区で目指すのは、全世代が「わぐわぐ」しながら「おもしろく」暮らせる、世界最先端の「超高齢化先進地域」。みんなの「心のふるさと」(「ココサト」)を作り続けるために、庄内への「もっけだの」という感謝とともに日々を紡いでいます。



2018年に大沢地区で撮影した。庄内弁ドラマ最新話「んめちゃ! ~LOCAL HEROES~」。白崎映美さんや大沢地区の住民など約50人が出演。

私は酒田市の漆曾根という農村集落に生まれ、高校卒業まで育ちました。庄内の環境は18歳までの自分にとって「何もない田舎」で、早く出て都会で暮らしたいと、東京の大学に進学。念願の上京でしたが、地元を離れて初めて気づかされたのが、庄内の素晴らしさでした。鳥海山や庄内平野の風景、食、庄内弁の響きなど「庄内に当たり前にあるもの」のすべてが、実は特別なものなのだと知ったのです。

大学卒業後も東京でWeb系の会社や出版社などで働き、仕事は面白かったのですが、それ以上に、地元を盛り上げたい、山形や庄内の魅力を広めたいという思いが強まりました。そこで、酒田と渋谷のライブハウスを会場に「もっけだフェスティバル」という地域おこしイベントを主催しました。その活動の中で酒田出身の歌手・白崎映美さんとの出会い、白崎さんが酒田市内の保育園を訪れた時の話として、「子どもたちがみんな標準語でしゃべって、シヨックだけ」という現状を聞きます。「このままでは庄内弁がなくな



(上)大沢地区の沼でじゅんさい採り。
(右)2021年8月開催時の大沢「大」文字まつり。八幡小の児童がデザインした色配置で7色の「大」文字が点灯。



なってしまおう」と危機感を抱き、地元の方言を後世まで残したいこうと企画したのが、庄内弁ドラマ「んめちゃ!」という映像作品です。白崎さんにもご出演いただき、YouTubeでの視聴数はシリーズ合計20万回以上。訛りや方言は地域の大切な独自性であり、誇るべき文化だと考えています。

その後、いつか酒田に戻って暮らしたいという思いが募る中、高校の先輩の和島経輔さんが、東京からUターンして遊佐町の地域おこし協力隊として活躍していることを知ります。自分も経験を地元で活かせるのではと、酒田市の地域おこし協力隊に応募。2018年5月から八幡地域・大沢地区に着任し、同地区に移住しました。

大沢のシンボルである、住民が草刈りで作った大沢「大」文字の活動を発信しながら、大沢の皆さんとLEDソーラーライトで「大」文字のライト点灯を企画し、毎年8月の「大沢『大』文字まつり」を立ち上げました。協力隊の任期後も、大沢地区の集落支援員に着任したのを機に、里山エンターテインメント企業「合同

動くことで見える 現実解から 地域をデザインする



毎春恒例の合同会社とびしまメンバーの集合写真撮影。20～30代が主な年齢層。



飛島でコスプレイベントを企画するきっかけとなった新入社員の女性

今年の春で、移住してから丸11年が経ちます。当初は1年間だけの居住を想定していましたが、1年目の終盤に仲間と「合同会社とびしま」を立ち上げることになり、今に至ります。

移住のきっかけは、学生時代に起こった東日本大震災後に東北へボランティアに来たことです。地域住民の底力を体感したことで、デザインという専門性を地域のために活用したいと考えたのです。まずはどこかの地域に飛び込んでみようと思いい、逃げ場がないことで鍛えられそうな離島を選びました。

山形県に初めて来訪したのは、飛島移住の時です。庄内という地域をほとんど知らないまま船に乗り、すぐに島暮らしが始まったせいか、初めて訪れた時の飛島の印象は、正直、あまり覚えていません。

ただ、酒田でお会いした人たちの、たまに発する庄内弁が理解できなかったことは覚えていてみます。さらに飛島に多いせいか言葉が



(上)海ごみ問題を解決するロボットを開発するメンバー
(右)海上から望む飛島

まったく聞き取れず、衝撃を受けました(笑)。

移住して1年目は、地域のあらゆる仕事をお手伝いする生活でした。相変わらず言葉はあまり理解できないままでしたが、春の例大祭というお祭りが地域の人たちと関係を深めるきっかけとなりました。お祭りの中で「手拍子」という楽器に急遽欠員が出て、何も知らない私が担当することになったのです。即興で何とか音楽に合わせたところ、上手だと褒められ、結果的に1年間の大漁や安全を祈願することお祭りは特別なものとなりました。今では、私たちの会社メンバーだけでお祭りの主要な役割である神楽と楽器をすべて担えるようになっていきます。

当社は、コンセプトとして「0次産業」を掲げています。これは、産業をつくる土台として、地域の自然・歴史・文化といった暮らしの風景を大切にすることを指しています。そのために地域に点在する小さな仕事をかき集め、雇用を創出して移住者を募集しています。仕事は多岐にわたり、旅館業や飲食業、ツアー企

画や水道施設の管理などさまざまです。最近では、島の人材と積極的につながり、ロボット開発やコスプレイベントなど特徴的なテーマを設定したプロジェクトを進めています。

飛島に限らず、地域は今の枠組みのまま持続していくことが難しいことは明らかです。いくつかの地域が役割分担をしたり、地域という枠組みをデザインし直したりする必要があり。日本各地にある地域の価値を継承するために、持続可能な地域コミュニティのデザインについて、体を動かしながら考えていきたいです。

合同会社とびしま 業務執行社員 松本 友哉さん

1988年、山口県生まれ。京都芸術大学大学院学際デザイン研究領域修了(芸術修士号[MFA]取得)。2012年に山形県の離島・飛島に移住し、Uターン仲間と「合同会社とびしま」を設立。現在、合同会社とびしま業務執行社員、CDO(Chief Design Officer)。他、数社で活動。





大鳥の人たちの言葉と 山の神様への祈りが 教えてくれること

ノウサギの巻狩りに臨む先輩猟師と僕



「大鳥てんご」管理人
田口比呂貴さん

1986年、大阪府生まれ。法政大学卒業、電子部品メーカーの営業に2年間勤めた後、地域おこし協力隊として大鳥に移住。任期終了後も在住し、大鳥の企業組合で働きながら、狩猟や民俗調査を行う。山菜・きのこの通販 & Webメディア「大鳥てんご」や中間支援団体 Sokedachi Creative 庄内、大鳥音楽祭実行委員会でも活動。

移住して9年になるが、6年目くらいから山が面白くなってきた。山は生きた博物館で、通い続けると山が少しずつ教えてくれる。危険な地形、岩石の違い、ワラビの採り時、ヤマドリへの付き場などなど。大鳥の人たちの言葉を読み返しながら、僕も少しずつ山から教わっている。先日、ノウサギが獲れない悔しさを漏らしたら、「山の神への祈りが足りないんだよ」と言われた。明日も頑張ろう。



地元の方々と交流しながら聞き取り調査を行う

「熊狩りに行けば、今にも落ちそうなスノーブリッジを渡らねばねえ時がある。今にも雪崩なだれが起きそうなところを横切らねばねえ時がある。その時に、『どうか神様、お助けください』と心の中で言うだろう。山には神様がいます、と私が言うのはそこや」。大鳥の人たちから聞き書きした言葉の中でも特に、心に残っている。

初めて熊の巻狩りに参加した年のこと。僕は先輩猟師の後ろを歩くことしかできなかったが、山を1日中駆けずり回って猟果があった。熊も含めて20kgにもなりそうな荷物を背負い、ヘッドライトを頼りにみんな下山した。慣れない残雪山歩きに疲れ果て、徐々に太腿から下に力が入らなくなっていた。「あと30分で帰れる...」川沿いの山裾を横切った時、一瞬で足が抜け、滑り落ちた。先輩から差し出された杖をつかんでなんとか這い上がったが、「もう5m落ちたら死んでたぞ!」と言われた。足元でゴウゴウと鳴るその水勢は僕の身体など容易に消し去ることができただろう。足の震えが止まらない。喉から言葉が出てこない。こんな経験は初めてだった。集落に戻



(上) 西大鳥の冬景色



(右) 地元の協力を得てぜんまい小屋を復元

り、最後の解体作業も眺めることしかできずにいると、「突っ立ってないで手伝え!」とごしやがれた。山と猟の厳しさを全身で思い知った日。最近になって、「あの時は山の神様が僕を生かしてくれたんだ」と思うようになった。

僕は元々、山に縁がある人生ではなかった。大鳥に住む1年前、ヒッチハイクで偶然出会ったおじいさんがいる。穏やかな人で、京都にある山小屋を拠点に裏山で山菜を採り、棚田で米を作り、清水を沸かしてコーヒーを飲み、薪で暖を取る生活をしてきた。見知らぬ青年を受け入れてくれたのが嬉しくて、何度も通って火に当たったりながら語らった。「山には生きるために必要な資源がある。でも、若者は山を離れ、里へ降りていく。地域のお祭りもなくなってしまった」。どうしてそうなってしまったのだろう。自分が住むことができたら他の若者も住めるんじゃないだろうか。素朴な疑問から山で暮らしてみようと思ひ、大鳥に流れ着いた。

現在は大鳥の企業組合で働きながら、狩猟、民俗調査などを行っている。

見れば見るほど
さわればさわるほど
なんだか愛おしくなる
そんな愛嬌たっぷりの
クセ強いぬいぐるみを発見

Brillarの 謎のイキモノたち

8月15日生まれ（獅子座）の、ビールが好きで陽気なおじさん。たまに自分勝手になるのはご愛嬌。そんな不思議なキャラクターのぬいぐるみがSNSなどを通じて巷で人気を集めている。その名も「アルフレッドおじさん」だ。

作っているのは東京都出身、酒田市在住のハンドメイド作家、守屋知子さん。15年ほど前に自身のブランド「Brillar」^{ブリジャー}を立ち上げ、オリジナルバッグを作ってきた。この「おじさん」を作り始めたきっかけは、およそ2年前、幼稚園児だった息子くんにカンガルーのぬいぐるみを作るとせがまれたこと。初のぬいぐるみ作りに悪戦苦闘し、生まれた謎のイキモノをお子さんに見せたところ、「かわいい」と大好評。それならと改良してご主人の知人の名前とキャラクターを拝借し、誕生日をお子さんが設定してインスタグラムにアップした。すると途端に反応があり、自身のオンラインショップに出品するとすぐに完売したのだとか。今や北海道から沖縄まで全国各地におヨメ？おムコ？に行った「おじさん」は300体超え。最近では新たに鼻の周りに白い丸が入って動物感が出た「イキモノ」も仲間入りした。

そんな謎のイキモノたちの謎な魅力は、コロロンとしたフォルムに微妙にクロスした足、中心に集まったまん丸い目と蝶ネクタイのような鼻とヒゲ。モフモフな冬毛バージョンやベロ出しバージョンなど、毛やサイズ、表情がそれぞれ異なるため、1人で何体もそろえる人が多いそう。酒田にヨメ入りした守屋さんから生まれた謎のイキモノたち。あの子はどこにヨメ入りするのだろうか。



一期一会な謎のイキモノたち。サイズは15～30cm。写真中央はアルフレッドおじさんの飼い猫「ネコデス」。商品は完成したらインスタグラムでお知らせし、オンラインショップ「morigoya」で販売。酒田市二番町の「2号室」では店頭販売も（不定休）。

Instagram : @morigoya_brillar
online shop : <https://morigoya.thebase.in/>

(取材・文 長谷川結)



さまざまな横島ほうき

以前、JR余目駅前の土産屋で色鮮やかな「横島ほうき」に目が留まり手に取った。その値段に驚くが、材料の「ほうきぎび」の栽培から一連の手仕事を考えるとその価値がわかる。お気に入りの一本を飾りたいという気持ちと、大切に使用したいという気持ちと、どちらも湧いてくる。小さな集落で作られてきたこの「横島ほうき」を次の世代に継承していきたいと、「横島ほうき手作りの会」では「ほうきぎび」の

寒明けのものの結び目きららかに
— 稲島帯木

うのは、柄に穂をくりつけられるのではなく、柄から穂先まで一本一本のほうきぎびを使用しているからだと言われる。

庄内町横島地区では、2000年ほど前から農家の冬の収入源として男衆がほうきを作り、女衆が売りに出ていた。掃除機などの普及で徐々に作られなくなっていったが、伝統を守り地域おこしを目指して「横島ほうき手作りの会」が発足した。材料の「ほうきぎび」は5月に種をまき、2メートルを超える丈にまで成長した8月に収穫、天日干しする。「横島ほうき」は穂先が硬く、よく使う部分を変えながら使えば、70年以上もつという。



横島ほうき作り

庄内俳句紀行

寒の明の手仕事 横島ほうき 作りを訪ねる

立春を迎えても庄内平野では雪がしまき、地吹雪で一寸先すら見えなくなる日もある。気づくと日脚が伸び、時折のぞかせる青空に春の光が舞い降りる。最上川流域にある横島地区を訪ねた。

雪晴れや藍一筋の最上川

— 中村苑子

トントんと木槌の音が、静かな作業小屋に響く。柄の部分を押しながら形を整えた後、台座に固定した紐で束ね、柄に印をつける。配色を考えながら手染めの木綿糸を選び、印に合わせて渾身の力を込めて縛る。力強さの中に繊細な心配りと技が光る。柄の中心には細木を入れる。握った時のフィット感が他のほうきと違

定植、刈り取り、ほうき作り体験を通して、農業の楽しさも伝えている。

冴返る色を並べて舟結び

— あべ小萩

ほうきで畳を掃く、やわらかく軽やかな音は心地良い。穂先から一本つながっている頑丈なほうきぎびは、最上川流域の土壌が生んだ地域の宝となる。かつては黒一色だった木綿糸や柄の先端の頭巾も、時代の変遷に合わせて鮮やかな色にする。とで、新たな伝統につないでいる。畳を掃くだけではなく、パソコンのキーボードの埃を払う現代ならではの使い方もある。

白鳥の帰るべく声揃へけり

— 角川照子

ほうきには古来「掃き清める」という意味があり、穢れをはらう道具としても使われてきた。その後、実用と結びついたその「用の美」が民藝の価値として認識された。今あらためて、ほうきは丁寧な暮らしと本当の豊かさに向き合うことの大切さを教えてくれる。作業小屋から外に出て、白鳥の声に空を見上げた。北帰行が始まると冬の手仕事が終わる、田んぼの支度が始まる。

撮影協力 横島ほうき手作りの会
写真・文 あべ小萩（月刊俳誌「月の匣」同人、俳人協会会員）



色とりどりの木綿糸



ほうきぎび



横島地区付近の最上川

季語
寒明・寒の明
(かんあけ・かんのあけ)
節分までの最も寒い「寒」が終わり、立春になること。また、その日。